介護における家族力

松原 清二医師
在宅療養支援診療所「まつばらホームクリニック」院長
総合内科専門医・循環器内科医
・日本循環器学会専門医
・日本内科学会認定医
・認知症専門医
・認知症サポート医

最近はソーシャルディスタンスを取るようになり、新型コロナウイルス（COVID-19）の新規発症は著しく減りました。

一方でこのソーシャルディスタンスが従来の人とのコミュニケーションのあり方を見直すように会はZOOMソフトを使ってやり取りをし、意外にも家でできる仕事が多いこともわかりました。

ご自宅で介護をされている方の中にも、テレワークをし始め、お身内の介護を手伝うことができるようになったという例もあります。

80代男性のがんの方のケースです。少しずつ食べられなくなり、足腰が弱り始め、トイレまで行く際にふらつきが強くなりました。会議や飲み

患者さん自身をご家族が数人で支えなければならないという状態でした。あるとき、トイレに連れて行ったものの、そこで患者さん自身が崩れるように倒れたため、以降はベッド上での生活へ移行されました。

このようなときご家族は、目の前で起こる急激な患者さんの容態の変化に戸惑うものです。そこで、必要に応じて当院の夜間看護師が訪問し、ご家族に患者さんの容態の変化についてご説明し、さらにご家族に〈患者さんはご自宅での療養を最期まで希望されている〉ということの意思の確認を行い、万一、介護の負担が重すぎるようならホスピス入所という選択があることなどをお伝えします。

このケースでもご家族と話し合い、改めて、医師の私と相談することに決めました。

ところがです。後日私が伺った際には、奥さまは看護師がお伝えしていたオムツの交換の仕方を習得されていて、「お父さんが最期まで家にいたいと言っていたから私は頑張る」と、ご主人の介護に自信をお持ちになっていました。そして実際、患者さんの希望に沿う形で、最期まで家で安らかに過ごすことができました。

今回のCOVID-19では、自宅待機中の娘さまも主たる介護者であるお母さんを心配されていましたが、介護に一つずつ自信を持って成長していくお母さんを最後のほうでは安心してご覧になっていました。

今回の出来事では人々が自宅待機を余儀なくされる一方で、家族内の絆の見直しや家族の力の大きさを改めて感じさせられました。

【まつばらホームクリニック】
☎ 042-439-1250
西東京市東町 4-14-18-2F
（訪問中のため不在が多い）
■電話対応 ： 午前9:00～午後6:00
■定休日 ： 土日（祝日は診療）
■訪問地域 ： 西東京市、東久留米・新座・練馬の一部
まつばらホームクリニック 検索
↑ 診療相談はこちらから